水の文化

消防の志

こころざし

室崎益輝「21世紀の都市消防を考える」
佐宗祐子「火を消す水も使い方しだい」
重川希志依・小村隆史「生き残りをかけて防災センスを磨くには」
「ベッドタウンを守る三つの消防物語」
「超不燃都市の消防水利」
浅田栄治「消防車メーカーが語る消火の現場」
村上 陽一郎「安全は達成されると壊れ始める」
神田 紅「江戸町火消しの心意気」
水の文化楽習実践取材「ハザードマップをつくろう」
古賀邦雄　水の文化書誌「火と水と」

水の文化 August 2005 No. 20

水の文化 2005 20

ミツカン 水の文化センター

表紙上：消火栓といって思い浮かべるのは、一昔前のこんな風景。
いつの間にか見せかけの格好良さが優先されるようになって、都市部からその姿が消えてしまった。
表紙下：ビルの消火栓をグリーンや建築デザインに溶け込ませ、わざわざ目立たなくつくられてある。
裏表紙上：消防自動車はどんどんハイテク、近代化してきたのに、給水ホースの先端はご覧の通り昔ながらの素材。
しかし、竹カゴとロープでつくられたこのフィルターに、安心を覚え、美しいと感ずるのはなぜだろう。
裏表紙下：消防団のポンプ格納庫の上には、必ず火の見櫓がある。
今では半鐘の代わりに、拡声器が防災情報を流し、朝夕を告げる。
引退したはずの半鐘が今でもまちを見下ろすのは、みんなの志の象徴なのであろうか。